

# この本を読んだ

②

## 金井美恵子著 『迷い猫あずかっています』

金井美恵子のいわゆる目白四部作、『文章教室』『タマヤ』『小春日和』『道化師の恋』の四つの「風俗長篇」は、登場人物たちが(猫も含めて)作品を自在に越境しつつ、思いがけぬ——というのはむしろ読者にとっての話だが、或いは、彼ら(登場人物)自身にとっても思いがけぬ?——ところで遭遇してしまう面白さに溢れている。この四部作中、『タマヤ』で拾われ、『道化師の恋』で失踪する白黒ブチの雌猫「タマ」のモデルが、本書の主人公、キジ柄の、「顔立ちとスラリとはしているけれど骨格のしっかりした肢体つきがケイリー・グラントに似ている」ともいえるし、「眠そうな顔をしている時はむしろジョン・ウェインに似ている」ともいえる、「器量良し」の雄の去勢猫「トラー」とばかり思っていたのだが、実際はその逆で、つまり、作者はこの四部作を書いてしまってから、「二十何年かぶりに」「あたかも実生活が芸術を模倣するかのごとく」本当に猫を飼い始め、そして迷い猫となった「タマ」はまたしても本書『迷い猫あずかっています』で拾われた、というわけなのだ。

それにしても、迷い猫だった「トラー」——作者が小学生の時分から何度となく読み返してきた「山のトムさん」の作者石井桃子訳の、ミルンの「ブー横町にたった家」に登場する「けっして迷い子にならない」仔猫から取った——が金

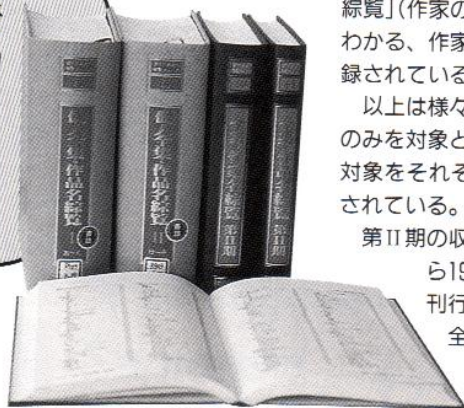


(新潮社 1993.6刊)

井家にやって来た当初、作者と姉の久美子の二人の「老嬢」がポスターを作り(自筆の「迷い猫あずかっています」のポスターが本書の表紙を飾っている)、近所の電柱や掲示板やペットフード屋の店頭には貼ってまわるエピソードは、『道化師の恋』のなかばで登場人物が迷い猫「タマ」の「おたずね広告」を貼ってまわる場面を、またしても正確に「模倣」しているかのようなのである。つまり、目白四部作に親しんだ読者にとって本書は、一種「どこかで読んだ本のような気がする本」であるのに相違ない。

雑誌連載時のタイトル『遊興一匹・かつぶし太平記』は、加藤泰の映画『沓掛時次郎・遊侠一匹』に倣ったもので——「いうまでもなく猫には、俠というものは無い」のだそうだ——金井美恵子の読者としては、やはり現在執筆中の『恋愛太平記』的なノリのこのタイトルになお愛着があるのはいうまでもない。(森 俊司)

新着の  
参考図書から



日外アソシエーツから「現代日本文学総覧シリーズ」の第Ⅱ期が刊行された。第Ⅰ期の内容を紹介しておく、「全集・内容総覧」(全集の各巻内容の一覧、第Ⅰ回配本の刊行年順)、「全集・作家名総覧」(作家の個々の作品がどの全集に収録されているかが一目でわかる、作家名順)、「全集・作品名総覧」(作品名からどの全集に収録されているか検索できるように編集)。

以上は様々な作家を総合的に集めた全集(現代日本文学全集等)のみを対象としているが、同シリーズには同様の編集方法により、対象をそれぞれ「個人全集」、「詩歌全集」に限定したのも、刊行されている。

第Ⅱ期の収録期間は、第Ⅰ期(1981年まで)をうけて、1982年から1992年までを対象として編集されている。個人全集が刊行されている作家の作品を捜すことは比較的容易だが、全集未刊の作家の作品を捜す時には、非常に便利な書誌だと思う。全て書誌コーナーにあり、使ってみて下さい。(中野直春)